

修士論文(要旨)

2011年1月

中学校英語教科書にみる異文化理解の題材
—量的・質的な分析—

指導 森住衛 教授

言語教育研究科

英語教育専攻

209J3051

五十嵐瞬

目次

I. 序論	1
1. 問題の所在	1
2. 本研究の目的	1
3. 本研究の構成と研究方法	1
II. 本論	3
第I章 題材における異文化理解の重要性ととらえ方	3
第1節 異文化理解の重要性	3
第2節 英語話者の増加と文化の多様化	5
第3節 題材における異文化理解の濃淡	12
第II章 題材における登場人物と取り扱われる国の量的分析と考察	18
第1節 登場人物	18
第2節 取り扱われる国	31
第3節 本章のまとめ	44
第III章 題材における異文化理解の濃淡の質的分析と考察	46
第1節 表層・物理的なもの	46
第2節 精神・伝統に関与するもの	53
第3節 価値観に関与するもの	58
第4節 人権に関与するもの	62
第5節 本章のまとめ	67
III. 結論	68
1. 本研究のまとめ	68
2. 本論文の応用性	68
3. 今後の課題	69
参考文献	70
資料	72
謝辞	83

要 旨

近年のグローバル化の影響から日本人が異文化と接触する場面が増えている。しかしながら、中学校の英語教育はそれに対応しているとは言い難い。中学校の学習指導要領のキーワードは戦後からほとんど「言語活動」「コミュニケーション能力」「実践的コミュニケーション能力」といった実用に重点を置いたものである。また、異文化理解教育(国際理解教育)の文言は、外国語科目の目標で出入りを繰り返し、ついには総合的な学習の時間にまわされることとなった。その考え方は当然、教科書の中にも現れていて、異文化の取り扱いよりもコミュニケーション能力を育成する内容が増えている。また、その異文化理解として取り扱われているものも大半が「英語圏理解」なのである。英語教育は外国語教育の導入の役割も果たしている。そのため、ただ単に英語圏理解に終始してはいけない。「1969年版の学習指導要領で異文化理解の対象が「英語を母語とする人々」から「広く世界の人々」と変わったため、確かに取り扱われる国はほぼ全大陸に分布している」(江利川,1992)が、英語圏以外の文化は名所を紹介する観光案内的なものである。まれにその国の精神や伝統にかかわるものも扱われているが、それも文化の核に迫っているものは少ない。「文化の表層をなでるだけでは、物珍しさだけに終始し、理解されるどころか蔑視さえ助長しかねない。しかし、その蔑視を取り払うことが教科書の使命」(森住,1992)である。

第Ⅰ章では、第1節でことばと文化のかかわり、語彙と文化の相互関係について、表現と文化について論じた。また、第2節では文化の多様化を題材の登場人物、取り扱われる国の観点から論じた。そして、第3節では題材における異文化理解の濃淡を論じた。本稿では、これらの論述、ことばと文化の相互作用、また、英語話者の増加や分布の拡大から、題材も取り扱いを広げるべきであると論じた。そして、異文化理解の取り扱いも昨今は情報化社会であるので、簡単な文化の紹介は容易に目にする。そのため表層的なものよりも、文化の核に迫るものが必要であると主張した。

第Ⅱ章では、英語教科書における異文化理解の対象と数量を導き出すために、現行教科書である2005年度版文科省検定済み教科書を取り上げ、第1節では登場人物を量的な分析し各教科書にどの程度の割合で外国人が登場しているかを検証した。また、第2節では取り扱われている国を計量分析し諸外国がどの程度の割合で取り扱われているかを計量した。その結果、教科書ごとに微妙な差はあるにせよ、全体を総合すると、登場人物も70%以上が英語圏の取り扱いであり、英語圏理解の傾向を導き出した。また、英語圏以外の取り扱いを豊富にすべきだと論じた。

第Ⅲ章では、英語教科書における異文化理解の濃淡を分類し分析するために、(森住,1995)を参考に表層、物理的なもの、精神や伝統に関するもの、価値観に関するもの、人権に関するものに分類した。その結果、比較的内容の薄い表層、物理的なもの、精神や伝統に関するものが、内容の濃い価値観、人権に関するものより10%以上上回っていることが明らかになった。そのため、教科書では文化の核に迫るような題材を増やすべきであると論じた。

そして、結論としてこういった英語圏理解の傾向をさげ、表層的な文化の扱いをより濃いものにするために、教員がこの制限された題材を広げ、濃いものにする必要があると提言した。また、この論文の応用性として他の教科書分析にも使用が可能であることをしめした。さらに、今後の研究の課題として他の時代の教科書の分析、生徒へのアンケート調査、国内異文化、分析を深める、の4点をあげた。

参考文献

- 青木保 2001.『異文化理解』岩波新書.
—— 2003.『多文化世界』岩波新書.
青木庸效 1991.「英語教材の中の題材」『日本英語教育研究史』第6号.
伊佐雅子 2007.『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社.
石井敏 1996.『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』有斐閣.
伊原巧 1990.『異文化理解をすすめる題材内容のあり方 —英語科教育の目的との関連において』信州大学教育学部紀要.
江利川春雄 1992.「異文化理解の視点からみた英語教科書の題材」『中部地区英語教育学会紀要』第21号.
—— 1991.「戦後の英語教科書にみる異文化理解の返還」『日本英語史研究』第7号.
木下雅仁 2001.「新学習指導要領にもとづく英語科教育の目的と教科書における題材観 異文化理解を焦点にして」『名古屋大学教育学部附属中学校』46 名古屋大学.
筧文生ほか 1990.『国際化と異文化理解(国際摩擦と国際理解)』法律文化社.
金田尚子 2005.「日本の中学校英語教科書にみる異文化理解 題材の観点からの教科書分析」『英語英米文学研究』33 龍谷大学
真尾正博 1992.「異文化理解と英語教材」『埼玉大学教育学部紀要』第41巻第2号
佐藤群衛 2001.『国際理解教育』明石書店.
佐野正之ほか 1995.『異文化理解のストラテジー50 の文化的トピックを視点にして』大修館書店.
鈴木孝夫 1973.『ことばと文化』岩波新書.
林千賀 2010.「日本の中学校英語教科書分析 異文化コミュニケーション能力育成の観点から」『成蹊人文研究』18 成蹊大学大学院文学研究科.
樋口信也 1995.『国際理解教育の課題』教育開発研究所.
本名信行 1990.『アジアの英語』くろしお出版.
本名信行ほか 1994.『異文化理解とコミュニケーション1 ことばと文化』三修社.
—— 2005.『異文化理解とコミュニケーション2 人間と組織』三修社.
溝上由紀・柴田昇 2009.「異文化理解と外国語教育」『愛知江南短期大学紀要』
望月昭彦 2001.『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店.
森住衛 1992.「英語教育題材論」『現代英語教育』第5回研究社.
—— 1995.「異文化理解教育とリーディング教材」『英語教育』大修館書店.
—— 2000.「新学習指導要領」『英語教育』大修館書店.
—— 2002.「文部省戦後半世紀の外国語教育政策」『英語教育』大修館書店.
—— 2004.『単語の文化的意味 friend は友だちか』三省堂
堀田隆一『英語史ブログ』2011年1月10日現在.
<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta/course/2009a/hello/2009-05-01-2.html>